

宮古島西原のシマユイ儀礼から一村・祭祀・人をめぐっての断章

上原孝三

1, はじめに一神籤のこと

宮古島市平良字西原（福山は除く）は、明治7（1874）年に池間島と佐良浜との分村で成立した。創立140年を超えた。西原分村は、首里王府による最後の移住政策である。分村当時の様子が、『県史編纂史料 宮古の部』（「大正4年の報告」）に次のようにある（注①）。

平良村字西原ノ移住

明治七甲戌年伊良部島佐良濱及池間島ヨリ九十戸移住ス。コレヨリ先、明治六年ヨリ宮古本島住民ハ其ノ準備ノ為同字ヲ開墾シ、同年八月及七月ノ両度ニ芋ヲ植エ家屋ヲ新築シ、其ノ上二十歳以上ノ男子ニハ一人ニ付一町十反歩ヅノ畠ヲ給與シ、且ツ一年ノ納税ヲ免レタリ。

西原分村に備え、「明治六年ヨリ宮古本島住民ハ其ノ準備ノ為同字ヲ開墾シ、同年八月及七月ノ両度ニ芋ヲ植エ家屋ヲ新築シ」という内容は、具体的である。「伊良部島佐良濱及池間島ヨリ九十戸移住」した住民は、まったく手つかずの野地に来たわけではなく、「宮古本島住民」が開墾した土地に、食料としての「芋」と新築の家屋が準備されていた。つまり、移住は計画的になされた、ということになる。

伝承に拠れば、芋を作付けした場所を「シーナカヂィー」（芋仲地）と呼び、現在の小字名にもなっている。

とはいえ、西原の祭祀儀礼が分村直後から行われたとは考え難い。何故なら分村直後は、更なる家造りや土地の開墾、麦・粟などの農作物の植え付け、食料の調達や日常生活用品の入手など生活に追われていたと考えられるからだ。

従って、現在西原に残されている祭祀儀礼がいつ頃から開始されたか、その正確な年代を知ることは不明とせざるを得ない。伝承に語られることもなく、文字化された記録も残っていないからである。

祭祀が実施され、現在のようになったことは確かなことだ。西原の祭祀はムトゥヂィマ（元島。元村）である池間に倣ったようだ（注②）。シマユイ（母選り）もその一つの事例であ

ったのだろうか（注③）。神役の選出は、カンフヂィ（神籤）による方法を採用。沖縄のノロ制度のように世襲制ではなく、カンフヂィによる神役の選出は、宮古では一般的な方法である。

宮古でいつ頃から籤による抽選で神役を決めるようになったか、その明確な時期を知ることは課題の一つであるが、おそらく明治以降ではないかと思われる。

『御嶽由来記』（注④）に、

御嶽拾六御前御座候つかさ拾六人有之候此代合之時は其一族の内より大安母見合を以在番頭へ引合相立候事

とある。「御嶽拾六」の「つかさ」（司）は、「代合之時」（司の交代の時）には、司の「其一族」より選んでいた事が推察される。つまり、籤による抽選ではなかったことになる。神役は、近世期の宮古でも沖縄のノロ制度のように、世襲制のようなシステムを採用していたと考えられる。従って、近世期の世襲制にとってかわる抽選のシステム導入がいつであるかが問題となる。

司になるためには、「大安母」や「在番頭」などの公的機関の認定を必要とした。換言すれば、抽選制の発生はそれら公的機関が認定を必要としなくなった時代と考えられる。抽選制は、おそらく「大安母見合を以在番頭へ引合」をしなくても何の支障もない時期から開始されたであろう。つまり、首里王府の政治行政や宗教のシステムが瓦解した以降のことと思われるのである。

明治時代の前期に西原へ移住した人々は、言ってみれば寄り合い所帯であった。そのような人々が、どのように祭祀集団を形成し、どのような方法で神役を選出し、いつ頃から祭祀を始めたか。政治的な中心人物は存在したであろうが、村を興した宗家が有るわけではない。

沖縄地方で言えば、村を興し政治の中心となるニーツチュ（根人）や宗教を司るニーガン（根神）は存在しなかった。寄り合い所帯とはいえ、祭祀が発生したのは、人々が精神的な紐帯を結ぶ必要があったからでもあろう。

祭祀を実施するには、中心となる人が必要である。その人を選ぶにどのような方法が妥当であるか。池間・佐良浜の事例を倣ったにせよ、寄り合い所帯であった西原の神役選出法には、カンフヂィはより妥当な方法であったのだろう。それは、現在まで継承されている。

本稿では、1994年から2000年までの西原のシマユイ事例を述べ、その期間の実態を報告する（注⑤）。

2, 神役の選出と神役の拒否

1999年11月6日、西原が揺れた。神役の選出儀礼・ンマユイ（母選り）のカンフヂイ終了後であった。ウハルヂイウタキ（大主御嶽）での神役選出を終え、選出された神役の家での儀礼を行う時間を決め、選出されたその人の家で落ち合った時、衝撃が走った。

5人のハナヌンマ（上の母）をはじめ、部落の幹部は立ち往生した。選出された本人が頑として拒み、家に入れてくれなかったからである。何人かの親戚縁者、当人の同級生が事情を聴き説得にあたったが、本人の拒否の意志は固く、為す術もなかった。5人のハナヌンマと部落の幹部は、その人の家の周辺で2時間ほど待機したが、事態の変化は見られず、流れ解散となった。このような例は初めてだという。結局、選出された人は神役に就かなかった。

神役の拒否。このような現象は、1970年代から90年代に掛けて、西原以外の他村落では既に発生していた。西原のムトゥヂイマである池間・佐良浜はいうまでもなく、「神の里」といわれる狩俣でも神役の拒否は行われていた。神役の拒否は祭祀の変容か消滅に繋がる。西原の場合、現在神役2人不在でも祭祀を継続しているが、同一祭祀でも以前の姿とは異なるようになった。

現在の西原では神役が少なくなったから、以前のように行えないのはある意味当然のことではある。現在、西原のある祭祀では、以前はなかった事柄を新たに付け加え、またユーグムイ（夜籠もり）を伴う祭祀を行うにあたり、ユーグムイの時間帯を朝に変更するなど、様々新しいことが展開されている。祭祀を継続するにあたりそれを変更していく。そうすると、変更以前の形が見えなくなりつつある。その結果、祭祀の本質を見失いがちになる傾向にある。祭祀の変更に全く問題がないわけではないのである。

西原は分村であるが故に、ムトゥヂイマである池間・佐良浜のように神役不在の「シイマ」（村・部落）になりたくないとの意識が強かった。また、実際に神役の拒否はなかったので安穏としていた。だから、他村落の神役の拒否はある意味対岸の火事だったのである。

現在からは考えられないかも知れないが、1970年代神役不在の村落には、一種の社会不安現象が湧出した。神役がないから祭祀もできない、そこで村人間で、村に何か悪いこと変なことが起こるのではないかと、という不安が広がった。

このような社会不安現象は近世期の宮古でも起こった。行政側が、御嶽での祈願や祭祀を禁止したからであった。近世と現代では時代が異なるが、従来行っていた祭祀や祈願を行わないと人々の心中が不安になる点は共通している。

西原では祭祀を実施するには困らないが、実際には女性祭祀集団・ナナムイヌンマに加入する人はそれでも年々減少していた。村の幹部が、家を訪ねナナムイヌンマに加入するよう

懇願する年もあった。火種は既に内在化していたのである。従って、西原の場合、いつ・誰がどのような形で神役の拒否を行うかにあった。神役の拒否は、起こるべくして起きた問題だったのである。その時、村落祭祀が何らかの形で変わる、という意識は村人にはまだ芽生えていなかった。

村落祭祀を存続する立場から言えば、神役を拒否する人は困った存在であるし、逆に祭祀を不要な因習だと捉える人にとっては格好な前例となった。いずれにせよ、シィマで生活する人々に、微妙で繊細な問題を投げかけたことになる。それが現在まで続いていて、村落の人間関係にも微妙な影響を与えているのではないか。

筆者は、祭祀の変容を否定するものではない。西原の祭祀は変容しており、ンマユイ祭自体も変化している。先述したように、現状の祭祀からはかつての祭祀で行われていた本質の部分が見えなくなっている。本稿執筆の直接の動機はそこにある。

3、西原の祭祀集団—女性祭祀集団・ナナムイヌンマ

神行事を担うのは多くは女性祭祀者である。祭祀儀礼を執行するには、その核・中心となる神役の選出・選定は必要である。西原では年間45ほどの村落祭祀があるが、それらの祭祀で主導的な役割を果たすのが、ナナムイヌンマ（七杜の母。ナナムイヌパー・七杜の姥ともいう。単にナナムイという場合もある）から選出されたハナムンマ（上の母。ハナムパー・上の姥ともいう）である。即ち、ウーンマ、アークシィンマ、ナカバイ、ウーンマヌトゥム、アークシィンマヌトゥムの5人である。

西原では、ここ20年ナナムイに加入する人数が激減した。1970年代には100人前後いた頃からすると驚くべきことである。2016年現在、ナナムイヌンマは4人である（注⑥）。神役はウーンマ・アークシィンマ・ウーンマヌトゥムの3人であり、ナカバイ・アークシィンマヌトゥムの2人の神役は不在である。従って、ナカバイ・アークシィンマヌトゥムの祭祀儀礼における仕事を3人で分担する。祭祀執行に汲々しているのが現状である。この点も祭祀の変容に直接的に繋がる。5人で分担していたことを3で行うので、手順や方法に変更が生ずるのは当然のことだろう。

以下、西原の女性神役の名称・職能・任期・人員を概説する。

《女性神役と祭祀集団》

【フヂィカサ】大司。通称ウーンマ（大母）。最高神女。村落祭祀における中心的な神役である。祭祀儀礼を執行する際に主祭者としての役割を担う。任期3～5年。1人。

【アグシンマ】歌を謡う母。カンチカサ（神司）ともいう。カンカカリヤ（神懸かる者）、サシイ（佐司）、アグシャー（歌を謡う者）、ムヌシイ（物知り）など多くの名称を持つが、現在はアグシンマと呼ばれるほうがほとんどである。

この神役はかつて村落の霊的職能者ムヌシイから選出していた。神懸かりが専門的であり、祭祀儀礼執行中神懸かり状態になり、カンガカイヌアグ（神懸かりの歌）を謡った、という。それ故アグシンマ・アグシャーと呼ばれたのである。

線香の燃え具合から物事・人事の吉凶の占いをするのもこの神役の仕事の一つとされる。任期3～5年。1人。

【ナカヂカサ】中司。通称ナカバイ（中栄え）。カンニガイ（神願い）の時、神への供物に過不足がないように準備し、供える役目をする。中司はフヂカサ、アグシンマの補佐もする。

また、フヂカサヌトゥム・アグシンマトゥムと三人一緒に行動し、祭祀儀礼がスムーズに行えるよう諸雑務を執行し、様々な手続きをこなす。任期終了の半年後、ナカバイニガイ（中栄え願い）を行う。任期1年。1人。現在不在。

【フヂカサヌトゥム】大司の供。ウーンマヌトゥム（大母の供）ともいう。ナカヂカサ・アグシンマトゥムとともにこの3役はトゥムンマ（供母）とも称される。ナカヂカサ、アグシンマトゥムと一緒に踊ったり、祭祀儀礼がスムーズに行えるよう諸雑務をこなしたりする。祭祀の開始前・終了後にフヂカサの送り迎えも行う（注⑦）。任期1年。1人。

【アグシンマヌトゥム】歌を謡う母の供。ナカヂカサ、フヂカサヌトゥムと一緒に踊ったり、祭祀儀礼がスムーズに行えるよう諸雑務をこなしたりする。また、祭祀の開始前・終了後にアグシンマの送り迎えも行う。任期1年。1人。現在不在。

【マドゥパー】暇な姥。神役ではない姥。マドゥンマともいう。マドゥパーは年齢階梯集団であり、各年齢集団で次のような名称を持つ。年齢は数え年。

- ・ 56歳の年齢集団 インギョーンマ（隠居母）。ハーニパー（大姉姥）ともいう。
- ・ 55歳の年齢集団 ナカアニパー（中姉姥）。
- ・ 54歳の年齢集団 アニパー（姉姥）。
- ・ 53歳の年齢集団 アニガマパー（姉小姥）
- ・ 52歳の年齢集団 特定名称なし。6年生という。
- ・ 51歳の年齢集団 特定名称なし。5年生という。

- ・ 50歳の年齢集団 特定名称なし。4年生という。
- ・ 49歳の年齢集団 特定名称なし。3年生という。
- ・ 48歳の年齢集団 特定名称なし。2年生という。
- ・ 47歳の年齢集団 ウイイディンマ（初出母）。1年生ともいう。

女性祭祀集団には加わらないが、祭祀の日程を確定・調整するヒューイトゥイがいる。

【ヒューイトゥイ】部落から依頼される。祭祀の良い日を選ぶ役目。祭祀に参加する場合もある。

ハナヌパーの中でも序列があり、縦の関係を形成している。また、ナカバイ・ウーンマヌトゥム・アーグシィンマヌトゥムの3人は、基本的には同年齢（同級生）であり、ウーンマとは年も離れていて、ウーンマに仕えることから擬似的な親子関係になる。

ウーンマとアーグシィンマは祭祀集団を統率するリーダーである。リーダーとしての支配の正当性や宗教的権威が村落社会からも認められており、女性祭祀集団内における紛争処理も成員やそれを取り巻く社会によって承認されている。

神役は、ユークイ祭が終了してからの1週間前後のンマユイ（母選り）儀礼で選出される。祭祀を執行するリーダーを選出することはナナムイに加入している者のみならず、その夫、兄弟・親戚関係者にも重大な影響を及ぼすので、村落最大の関心事になる。ナカバイ・ウーンマヌトゥム・アーグシィンマヌトゥムの3役を決める際にはさして問題にならない。ウーンマとアーグシィンマの選出の時が問題となるのである。責任重大な神役なので誰しもがウーンとアーグシィンマの役に就くことを躊躇する。

この両神役は同年には選出されないように工夫されている。言を換えれば祭祀実施におけるリーダー役が任期満了時に同時にインギョウ（隠居）できないことを意味し、どちらか一方がインギョウしても祭祀儀礼の手続きに混乱が生じないよう配慮されている。

尚、本稿では5人の神役をウーンマ・アーグシィンマ・ナカバイ・ウーンマヌトゥム・アーグシィンマヌトゥムと名称ではなく通称で記述する。また、ナナムイヌンマをナナムイと略記することもある。西原では一般的に、ナナムイといえばナナムイヌンマをさす。

4、西原のンマユイ儀礼

ンマユイは、豊饒祈願祭祀ユークイ（世乞い）終了後、約1週間前後に行われる。ユークイには新たに47歳の集団・ウイイディンマ（初出母）が加入する。このウイイディンマか

ら3神役を選ぶ。

ンマとは母の意でありユイは選り、の意である。従って、ンマユイは、母選りの意であり女性神役の選出儀礼のことをいう。ンマユイ儀礼を村落祭祀とみなすかどうかは論点に分かれるところである。筆者は、ンマユイは村落の神役が参加することから村落祭祀とみる立場に立つ。ンマユイは神役の任期切れに伴って行われる。ンマユイに関しては次のような不文律がある。

<ンマユイのウタキでの不文律>

- ① ナナムイへの加入は個人の自由意志であるが、いったん加入し、ンマユイで選定され、神役を承諾したらその神役を途中で辞めることはできない。
- ② ンマユイでの選定・決定はいかなる人といえども、その選定・決定に従うこと。すべては神の意志である、と考える。
- ③ 選出対象の人は、ウハルディウタキでの選出儀礼に同席するか否かは個人の自由だが、代理人の出席は認めない。
- ④ 御嶽内での出来事はすべて神の意志であるので、口論せず不平も言わない。

ンマユイ祭祀儀礼のみならず、御嶽内では静かに行動し、口論などもつての外である。御嶽での祭祀実施中うるさくすると年長者から注意があった。

ンマユイは、ウハルディウタキのウドゥヌ（御殿）内で行われる。ハナヌンマの祈願と踊りなどを行った後に実施される。

以下、ンマユイ儀礼の日時・場所・参加者・選出方法などについて述べる。

- ・目的 神役の選出
- ・日時 旧暦9月頃 午前7時頃から開始する。
- ・場所 ウハルディウタキ（選出後は選出された新しい神役の家）
- ・参加者 女性 ハナヌンマ（5人）、ヒューイトゥイ（日選り取り）、選出対象者で参加希望者（注⑧）
男性 字長、字長のお供、班長会長、健永会長、健永会長のお供、市議員（2人）（注⑨）
- ・選出対象者 ウーンマ、アーグシンマ、ナカバイ、ウーンマヌトゥム、アーグシンマヌトゥムの5人。年によって選出対象の神役が変わる。
- ・選出日の設定 ヒューイトゥイが吉日を選ぶ。
- ・選出パターン 神役の選出は、次の3パターンである。
(1) ウーンマ、ナカバイ、ウーンマヌトゥム、アーグシンマヌトゥム

- (2) アーグシィンマ、ナカバイ、ウーンマヌトウム、アーグシィンマヌトウム
- (3) ナカバイ、ウーンマヌトウム、アーグシィンマヌトウム

「女性神役」の項で述べたように、ンマユイは神役の任期切れに伴って行われる。ウーンマの任期は3年～5年。アーグシィンマの任期も3年～5年。ウーンマの任期切れの場合は(1)のパターン、アーグシィンマの任期切れの場合は(2)のパターンとなる。ナカバイ、ウーンマヌトウム、アーグシィンマヌトウムの任期は1年である。従って、ナカバイ、ウーンマヌトウム、アーグシィンマヌトウムは毎年選出される。上記の(3)のパターンである。

- ・選出方法 選出対象となる女性の氏名を書いた紙を丸める。丸めた紙をブン（盆）に置く。字長がブンを持ち上げ、ブンを左右に振る。落ちた紙を広げ氏名を字長が読み上げる。落ちた紙が1つとは限らず、2・3の紙も落ちる場合もある。その場合も有効と見なされ記録される。記録は、班長会長が行う。記録した後、紙を丸めブンに乗せる。字長は再びブンを左右に振る。3回連続落ちた者（紙）が、その神役に選出されたことになる。以下にウーンマの選出例を示す。

	A	B	C	D	E	F	G
1回目	○	×	○	×	○	×	×
2回目	×	○	○	○	×	×	×
3回目	×	○	×	×	×	×	○
4回目	○	○	○	×	×	×	×

- <注>① A～Gは選出対象者となる7人を示す。
- ② ○はブンから落ちた印、×は落ちなかった印。
- ③ 上記の表では、四回目でBさんが選出されたことになる。

連続3回はなかなか落ちそうでないが、1994年から2000年の事例では、神役1人につき費やした時間は10分以下であった。

- ・選出順序 選出の順序は格の高い順から行う。神役の選出パターン（１）の場合、①ウーンマ、②ナカバイ、③ウーンマヌトゥム、④アーグシィンマヌトゥムの順になる。トゥムの場合、それぞれ神役の高い方に準じる。ウーンマが決定すると、ウーンマ選出対象の紙を取り除き、②ナカバイ、③ウーンマヌトゥム、④アーグシィンマヌトゥムの選出対象の紙をブンに置く。以下、同様に決定した人の紙は取り除く。

選出パターン（２）の場合、①アーグシィンマ、②ナカバイ、③ウーンマヌトゥム、④アーグシィンマヌトゥムの順になる。

選出パターン（３）の場合は、①ナカバイ、②ウーンマヌトゥム、③アーグシィンマヌトゥムの順になる。

上記の表を、選出パターン（３）の場合とすると、ナカバイはBさんに決定。そして、改めてリセットせずにそのまま継続し、②ウーンマヌトゥムを選出する。②ウーンマヌトゥムが決定すると、③アーグシィンマヌトゥムの順になる。そして３役が決定となる。

ナナムイに加入した段階で例え３人であっても必ずンマユイは行う。３人といえども当人同士の合議や希望は許されない。①ナカバイ、②ウーンマヌトゥム、③アーグシィンマヌトゥムの順で選出する。その際、①ナカバイ、②ウーンマヌトゥムが決定しても終了にはならない。誰がアーグシィンマヌトゥムになると明らかに分かっている、カンフヂィでアーグシィンマヌトゥムを確定する。

そうしないと神が決定したことにはならないからである。また、カンフヂィを行わないと、当の本人がカンフヂィで決定しなかったから神役を、引き受けないと拒否される可能性もあるので、ブンに乗せて揺する。

- ・選出後の当日昼 神役になる人の家でのお祝い。神役の格の高い方から廻る。神役の選出パターン（１）の場合、①ウーンマ、②ナカバイ、③ウーンマヌトゥム、④アーグシィンマヌトゥムの順で家を廻ることになる。
- ・選出後の祭祀参加 新出の神役は、ンマユイ以降の祭祀からその神役の後ろについて、祭祀実施の手続きを見て学ぶ。いわば見習い期間となる。例えば、ナカバイに選出されたら、現役のナカバイの後方で見学する。

- ・新旧神役の交代式 旧暦の正月1日に、ウハルヂウタキで新旧神役の交代式を行う。
ンマユイを行う際には、選出者や選出対象者はナーバスになる。ンマユイを行うには、まず紙に氏名を書かねばならない。その際、自筆ではなかったとか、氏名に誤字があるから自分ではないとか様々な小さなトラブルが起こる。ある意味不可解な行為であるが、これは、神役になりたくない、神役を回避したい心情の表れである。
しかし、ンマユイがいかなる意味を有しているかは、選出対象者である本人達がよく知っている。不満は残るにしても、神役に選出されたらその決定を受け入れ、村人も決定に従った。

5、ンマユイの事例から—1994年から2000年までの事例と考察

ウーンマ、アグシィンマ、ナカバイ、ウーンマヌトゥム、アグシィンマヌトゥムのハナヌンマ5人は、原則として女性祭祀集団・ナナムイヌンマに加入した者から選出される。

ナカバイ、ウーンマヌトゥム、アグシィンマヌトゥムの3役は、毎年ウイイディンマ（初出母）から選出される。以下、1994年から2000年までの事例を挙げる。

1994年には、ウーンマ、ナカバイ、ウーンマヌトゥム、アグシィンマヌトゥムの4神役が選出された。ウーンマに選出された人は、泣きに泣き両脇を友人に支えられながらウハルヂウタキから出てきた。選出された人の夫が、夢の中で大きな鳥賊を捕ったとのこと。だから、ウーンマに選出されたとのことである。鳥賊は、ウパチイ祭や、ウーンマヌトゥシィヌバンなどで用いられる。神からウーンマに成るよう夢で告げられ、鳥賊を捕ったことで承諾の返答になった、という考え方である。

1995年には、アグシィンマ、ナカバイ、ウーンマヌトゥム、アグシィンマヌトゥムの4神役が選出された。アグシィンマに選出された人は、ンマユイ儀礼執行以前に、アグシィンマに選出される夢を見たようである。宮古各地のムヌシィー（物知り。沖縄のユタに相当する）を訪ね歩き、ハンヂィ（判事）をしてもらったところ、アグシィンマに選出される旨を言われたようである。

本人は、アグシィンマに選出されることを否定してもらいたい、アグシィンマになるのは自分ではないことを願っていた。つまり、他の人がアグシィンマになると言って欲しかったようである。ンマユイ当日、本人はウハルヂウタキに行かず、家で待機し泣き濡れていた。このようにンマユイ以前に、夢で神から神役を告知される例が少なからずあった（注⑩）。

1996年には、ナカバイ、ウーンマヌトゥム、アークシィンマヌトゥムの3神役が選出された。この年のンマユイのカンプヂィは、10分くらいであっけなく終了した。3人の選出だといっても、必ずカンプヂィを行う。本人達3人の話し合いでの決定は認められない。これは将来生じるかもしれない人間同士のトラブル回避の機能を果たす。

1997年には、ウーンマ、ナカバイ、ウーンマヌトゥム、アークシィンマヌトゥムの4神役が選出された。この年に選出されたウーンマは西原生まれではなく、ユシィヂィマ（他の村。佐良浜）から嫁入りした女性であった。従来、西原生まれ西原育ちが選出されたが、この年初めて西原出身者でない女性が選出された。

古老の女性達は、西原出身者でない女性が選出されたことを残念がった（対象者7人中6人が西原の生まれ育ちであった）。しかし、村全体としては選出された女性は同じ「池間民族」だから、良しとしようという雰囲気であった。

就任祝い場で、ウーンマに選出された女性は泣いていた。泣いている嫁を姑は叱咤激励していたが、その表情は嬉しげで誇らしい雰囲気を醸し出していた。嫁のウーンマ就任を喜んでいたのである。

1998年には、ナカバイ、ウーンマヌトゥム、アークシィンマヌトゥムの3神役が選出された。この年のンマユイのカンプヂィも10分くらいで終了した。

1999年には、アークシィンマ、ナカバイ、ウーンマヌトゥム、アークシィンマヌトゥムの4神役が選出された。アークシィンマに選出された人が、神役拒否をしたのは冒頭に述べた通りである。ナカバイ、ウーンマヌトゥム、アークシィンマヌトゥムは就任した。

2000年の新加入者は、3人であった。ナカバイ、ウーンマヌトゥム、アークシィンマヌトゥムの3神役が選出された。

1996・1998・2000年のンマユイ儀礼は、スムーズに終了した。「ナカバイ、ウーンマヌトゥム、アークシィンマヌトゥム」の3神役を選出する場合には、トラブルは発生せず、選出儀礼後の祝いそのものもスムーズに進行する。概して時間を要しない。その理由は、

- ① ナナムイヌンマに加入する時点で、初年の神役を引き受ける覚悟をしていること。
- ② ①に関連して、できればナカバイをと希望する。ナカバイ経験者は、後年ウーンマやアークシィンマ選考の対象外になるからである。ナカバイはカンブンの担当・管轄をする。一度カンブンを担当・管轄した者は、二度はカンブンを担当・管轄できないという不文律があるからである。
- ③ ナナムイ10年の務めの中、最初の1年だけ我慢すればよい。特にナカバイ経験者は、あとの9年マドゥパーでいられる。ウーンマヌトゥム、アークシィンマヌトゥムも、

後年うまくいけば、ウーンマやアークシィンマにならない可能性もある。

と考えているからである。「ナカバイ、ウーンマヌトゥム、アークシィンマヌトゥム」の3神役は、祭祀の供物の準備や雑役が主な仕事なので、雑役係的な要素が強い。つまり、ウーンマやアークシィンマのような精神的なプレッシャーが強くなるのしかかる神役とは質的に異なるのである。

ナナムイに新たに加入するウイディンマの人数が多ければ、1年目からインギョーするまでマドゥパーでいることを理想とする人もいる。

上記の調査で問題になったのは、1997年と1999年の両年である。97年にはウーンマ、99年はアークシィンマ選出の対象になった年である。なぜ問題になったかを考える前に、「西原の女性祭祀集団と選出対象神役」について述べたい。上記の「女性神役と祭祀集団」も参照されたい。

「西原の女性祭祀集団と選出対象神役」一覧

(2001年9月現在)

干支	名称	年生	選出対象の神役	加入年
申	隠居		アークシィンマ	1988
酉	隠居		アークシィンマ	1989
戌	隠居		ウーンマ	1990
亥	ハーニパー (インギョーンマ)	10年生	ウーンマ	1991
子	ナカアニパー	9年生	選出対象外 注①	1992
丑	アニパー	8年生	アークシィンマ注②	1993
寅	アニガマパー	7年生	アークシィンマ注③	1994
卯	(特定名称なし)	6年生	ウーンマ	1995
辰	(特定名称なし)	5年生	注④	1996
巳	(特定名称なし)	4年生	ウーンマ	1997
午	(特定名称なし)	3年生	アークシィンマ	1998
未	(特定名称なし)	2年生	アークシィンマ	1999
申	ウイディンマ	1年生	ウーンマ	2000

注① 子年は選出対象外となっている。子(根)を引けば植物は枯れるので、子年はウーンマとアークシィンマの選出対象外という説明がなされた。実際にはこの年ナナムイへの加入者が少なく、ウーンマとアークシィンマの選出対象にはならないという条件で加入した者がいる。

注② アークシィンマに選出されるも拒否。

注③ 注②の拒否を受け、寅年のT・Yさんが責任を取る形でアグシィンマを引き受けたが、「本来自分が行う神役ではない」と言明し、途中で退役した。

注④ 辰年の加入希望者は1人だった。辰年の女性は加入を1年繰り下げ、巳年の人と一緒にナナムイに加入した。必然的に、辰年はウーンマの選出対象だったが空白の1年となり、神役選出対象が1年ずれた形になってしまった。つまり、ここで選出対象の原則を変更してしまった。

注③で述べたように、アグシィンマが途中で退役してしまった。祭祀実施上具合が悪く祭祀に支障を来すということで、午・未の両年の生まれがアグシィンマ役を引き受けることになった。午・未の両年の人々は、ナカバイ経験者を除き、5人でアグシィンマを1年交替で行うことにした。順番はカンフヂィで決めた。

本来、ウーンマとアグシィンマは、上記の表に従えば、申・酉がアグシィンマ選出対象者、戌・亥がウーンマ選出対象者であった。つまり、二つの干支を1対としてウーンマとアグシィンマの選出が交互に行われていた。だから、ナナムイに加入する段階で、加入者は既にウーンマ対象選出か、あるいはアグシィンマ対象選出のいずれかの場合になることを知っていたのである。

換言すれば（西原当地の言葉で言えば）、ウーンマ組かアグシィンマ組かである。だから、加入するに当たり、将来ウーンマあるいはアグシィンマの神役を避けなければ、神役ナカバイを希望するのは、ごく当然な論理である。誰しもが、ウーンマやアグシィンマにはできればなりたくないのである。

上記の表を見れば、ウーンマとアグシィンマの任期が3年から5年というシステムが理解できよう。任期満了になってもナナムイに存続するようなことはせず、任期期限が終了すると同時にインギョーするようなシステムを採用している。つまり、ある程度祭祀を経験した人から選出するようにしているのである。

また、ウーンマとアグシィンマは、同年に選出されない。祭祀実施上のリーダーであるウーンマ・アグシィンマの同時インギョーもない。これはシステム上、二人の中一方がインギョーしても一人が残留し、祭祀がスムーズに実施できるよう工夫されている。

さて、1997年には、ウーンマが選出される年だった。そのとき問題となったのは、ある一人の女性を予め選出対象から外すことにあった。ウーンマに選出される対象のナナムイの人々は不満を持った。なぜその人は対象から外されるのか、と。戌・亥生まれは、選出対象になって然るべきではないか、という主張である。要するに不平等ではないかと訴えた。

神役に当たりたくないという心情が働き、人数が多ければ当たる確立が低くなる考えが一方にはある。

不満を持った女性達の主張の背景には、対象外になる一人の女性の存在があったが、その問題に触れる前に、次のことを確認しておきたい。

1993年頃から、ナナムイに加入する女性が減少し始めた。以下、その理由を記す。

＜ナナムイに加入したがない理由＞

- ① 難関の行事・祭祀儀礼が45以上あり、日常生活・家庭生活・社会生活を営む上でかなりの行動の規制を受ける。また、家族に負担を強いることになる。
- ② 年間の行事・祭祀儀礼に参加することは、精神的・肉体的のみならず、経済的にも負担を強いられる。
- ③ 数え年47歳は働き盛りであり、職場では中堅クラスである。かつ子どもの養育費がかさむ時期でもあるので、加入は避けたい。
- ④ 人間関係の煩わしさと非科学的かつ非合理的な風習は、現代生活にそぐわない（野蛮な風習であるとの認識）。高等教育を受けた者に特にそのような傾向が見える。
- ⑤ ウーンマやアグシンマになったら責任が重い。
- ⑥ 他村の嫁になった。
- ⑦ 他の宗教団体に属している。

以上が、大まかな理由である。

それでも何らかの形でナナムイに加入する人はいるが、年々減っていく加入希望者。祭祀の担い手がいないと祭祀は存続できない。困ったのは現役の神役や部落の幹部である。部落の幹部は少なくとも、まず祭祀儀礼上必要なウイディンマ3人の獲得に汲々する。部落内の加入候補者の家を訪問し、加入を勧めたのである。幹部達は、是非加入して欲しいと懇願した。

上記の対象外になった女性は、後年ウーンマに選出されないことを条件にナナムイ加入を承諾したのであった。年を経てその条件が忘れ去られてしまった。加入条件を提示されないまま、ンマユイ当日を迎えたので議論を呼んだのであった。だが、加入時の条件が部落記録ノートで記録・記載が確認されたので、最終的に対象者全員が納得する形になった。納得したもう一つの理由は、その人の性格や家庭環境状況を皆が知悉していたからである。

しかし、問題がないわけではない。従来、ナナムイへの加入は条件付きではなかった。加入前の条件は、いわば部落の幹部との契約による。現在80歳以上の西原の女性はナナムイへの加入を当然のことと考えていた（注⑩）。このような古老の考え方からすれば、条件付

きの加入は思慮外である。

1999年のアグシィンマの件については既に触れた。ここで、西原の女性がウーンマやアグシィンマになりたがらないかを記す。

＜ウーンマやアグシィンマになりたがらない理由＞

- ① 難関の行事・祭祀儀礼が45以上あり、日常生活・家庭生活・社会生活を営む上でかなりの行動の規制を受ける。また、家族に負担を強いることになる。アグシィンマの場合は家が祭場にならないが、ウーンマの場合、ウパチィ祭などで家が祭場になる。
- ② 年間の行事・祭祀儀礼に参加することは、精神的・肉体的のみならず、経済的にも負担を強いられる。例えば、供物などの出費が個人負担になりがちである。
- ③ 数え年47歳は働き盛りであり、職場では中堅クラスである。かつ子どもの養育費がかさむ時期でもあるので、責任の重い神役は避けたい。
- ④ 村を守護する（シィマウ ダチィ・村を抱く）のは、ウーンマやアグシィンマの役割であるので、何かトラブルがあれば、責任を問われる。極端に言えば、自然災害など神役の責任とは本来関係ないことでも、神役の所為にされ、裏で陰口を言われる。
- ⑤ ウーンマ・アグシィンマになったら責任が重く、煩わしい。
- ⑥ ウーンマ・アグシィンマの宗教的権威の低下。価値観が多様になり、かつてほど敬意を払われなくなった。
- ⑦ ウーンマ・アグシィンマのタブーの多さ（現在は以前に比べ少なくなった）。
- ⑧ ウーンマ・アグシィンマになったとしても、仕事を辞める状況ではない。神役を引き受けたからといって、部落から年収に見合う金額が支給・保証されることはない。また、年休の行使には限度がある。

以上が、大まかな理由である。

ウーンマ・アグシィンマに選出されることは、それなりに名誉なことである。夫婦円満、親子三代揃い家庭円満でかつ家族が健康であることが、神より認定されたからである。そのような環境にいる女性が選ばれると村人も意識している。つまり、神の認定を村人も肯首し認定する。逆にいえば、村人が認定していることを、神が保証していると考えても良い。ウーンマ・アグシィンマに選出されることが、名誉なこととはそのような意味においてである。

それにも拘わらず、ウーンマとアグシィンマ役を忌避するのは、詰まるところは責任の重大さと精神的なプレッシャーが大きいからであろう。祭祀実施上の煩わしさと村人の世評も加わる。

さて、アグシィンマに選出された人が、アグシィンマになることはなかった。もう一度ンマユイ儀礼をすることもできず、有効な手段を講ずることもできなかった。結果的に、前任のナカバイが責任を取るという形でアグシィンマになった。ナカバイ経験者は、ウーンマ・アグシィンマになれないという慣習をここで覆した。従来例からすると極めて異例なことが惹起されたことになる。不文律という掟が破られた。

2001年以降、ナナムイ加入希望者が激減した。そこで、ンマユイをウハルヂィウタキではなく字長の家で行うとか、ナナムイ加入対象者の本人の意志とは無関係にンマユイをしたとか、ンマユイも様々に形式を変え行われてきた。これらのすべての行為は神役の選出であり、祭祀存続のためであった。

西原の人々は、祭祀の継続と消滅の狭間に立たされている。どの方向に進めばよいのか正に暗中模索の状態であり、それが現状でもある。伝統と現代という古くて新しい課題にどのように対処するのであろうか。

6、神のバトン

ウーンマとアグシィンマの任期は、3年から5年だと先述したが、ここで具体的に7人のウーンマの任期事例を示したい。在任期間は短い人で3年、長い人で5年となっている。人の人生の中で3年から5年は決して短くない期間である。その期間、ウーンマは日常生活の行動を規制された。精神的・肉体的に厳しいものがあつたことは容易に推察される。

さて、ウーンマ、アグシィンマ、ナカバイなどの神役経験者は、退役後には退役儀礼の手続きを踏まねばならない。

西原の歴代ウーンマ (1974～2001年)

2001年9月現在

	ンマユイ年	就任の年	退役の年	在任期間	備考
N・U	1974年	1975年	1977年	3年 (注⑫)	故人
N・H	1977年	1978年	1981年	4年	故人
N・Y	1981年	1982年	1984年	3年	西原生
N・S	1984年	1985年	1988年	4年	西原生
U・T	1988年	1989年	1993年	5年	西原生
I・H	1993年	1994年	1996年	3年	西原生
Y・E	1996年	1997年	2001年	5年	佐良浜生

ウーンマ、アグシンマ、ナカバイの神役経験者は、退役約半年後をめどに退役儀礼を行う。ウーンマとアグシンマの場合は、ムチジャウディニガイ（持ち上手願い）といい、ナカバイの場合はナカバイニガイ（中栄え願い）と称する。いずれも神役の仕事を立て派にこなし終了した。大役を果たしたのである。そこで、慰労と感謝の祝いとなる。

ウーンマとアグシンマがムチジャウディニガイ（持ち上手願い）やナカバイニガイを行うのは、カンブンを抱いたから（持ったから）、という理由でなされるとの説明があるが、アグシンマの場合何故ムチジャウディニガイ（持ち上手願い）をするのか、その説明が明瞭でない。勿論、アグシンマも祭祀儀礼上カンブンを持ったりはする。

しかし、二つのカンブンはそれぞれウーンマとナカバイが管理・管轄したことになる。アグシンマ管轄のカンブンはない。カンブンには神の靈威が宿っていると考えている。ムチジャウディニガイの目的の一つはその靈威を除去することにある。神の靈力に人間の心身が弱められていく、と考えているからである。

アグシンマは本来神懸かりする女性シャーマンである。西原にみられるシャーマンの神懸かりは、ウタキに籠もりを伴った静かな時に神懸かりする事例が多かった、と推測される（注⑬）。神懸かりは体内に神が宿り、神の意志を言葉や歌であらわす。アグシンマの体内には神の靈威が宿っていると考えるのではないか。ムチジャウディニガイの目的は、その靈威を除去することにあると思われる。

ムチジャウディニガイやナカバイニガイは、いわば神役退役の儀礼であるが、その儀礼を行って、すべて終了という観念が西原では強い。責任を全うしたことになる。ということは、次の代のウーンマ、アグシンマ、ナカバイとは無関係ということの意味するのだろうか。

狩俣では次の世代の神役が出現して、神役のバトンを引き継いでから、神役は終了という考え方を持っている。神役のバトン引き継ぎは、神のバトンのリレーともいえる。次の世代が現れない場合はどうなるのか。一人の神役の問題に帰するのはあまりにも酷ではないか、という意見もある。退路が断たれている状況に置かれている。バトンを渡せない人はいかにして神役に終止符を打つのだろうか。

西原の場合は、退路は確保されている。ムチジャウディニガイ・ナカバイニガイでその神役は責任を全うしたことになるから、神役のバトンリレーは次のシマユイの結果に委ねられる。

7, 最後に一祭祀と人

人間は社会のなかに産み落とされる。その後、社会の中で自己を意識し、自己を意識するかたちで社会化される。社会化されるということは、逆に自己を意識することであるが、ひとたび自己を意識すると、社会との折り合いをどうつければ良いかを考えるようになる。世界は不可解に満ちたものだ。不可解に満ちた社会との折り合いを人はどのようにつけるのであろうか。

シィマに産み落とされた人もまた然りである。シィマは社会であり、世界秩序のすべてであった。シィマに生まれ、シィマで育ち、シィマを生き、シィマに死ぬ。シィマに産み落とされた人は、シィマの因習・慣習に縛られ、関係の濃い人間関係を生きることになる。シィマから離れると人は不安に陥った。

シィマの因習・慣習の典型的なものとして、神行事（祭祀）がある。神行事の核心はカミ（神）の存在である。神の絶対性・合理性を信じていたからこそ、人は自分を取り巻く世界を合理的に説明しようとした。あるいは、宗教的な確信により、神は導き出されたのではなからうか。

宮古諸島の神行事は、近年急速に消滅あるいは形骸化の傾向にある。その大きな要因には近代合理主義に基づく経済の発展、それに伴う前近代の社会生活基盤の崩壊、更には社会・個人の価値基準の多様化、高等教育の普及等があると思われる。

無論、原因・要因はそれだけに還元されるものではなく、シィマそのものと個人にも問題は内在する。村の神役とシィマビトウ（村人）との両者の間の神行事に関する意識のズレ。あるいは神役に選出されたにも関わらず、それを引き受けず拒否する現象が宮古各地でみられたのである。

社会・村・家庭・個人レベルでのいろいろな問題が複雑に絡み合い、神行事がスムーズに行えないようになっているのが現状であろう。社会変化に伴う当然の帰結との見解からすると、説明は容易であるかのようにみえる。だが、事はそう単純に解決しそうにない。

神行事を担うのは多くは女性祭祀者である。西原の女性祭祀集団ナナムイもまた一つの社会である。祭祀の継続が危ぶまれる中、女性祭祀者もシィマに生き、神を祀る者として生きていく。神行事の消滅あるいは形骸化の傾向にある宮古のシィマのなかでも、西原は伝統を守ろう、祭祀を継続させようとする意識が強くみられる地域であった。神行事や神女組織に変化があっても、未だに伝統が継承されている。伝統がそれなりに継承されるには何らかの理由・要素が働いているのであろう。

西原の神行事の中でも有名な祭祀はユークイ（世乞い）である。ユークイには、この祭祀

でナナムイヌンマを隠居するインギョーンマを胴上げする場面がある。場所は、ウハルヂイウタキ（大主御嶽）とンマヌハウタキ（午の方の御嶽）の二カ所である。ユークイ祭を最後に祭祀集団ナナムイを10年無事勤め上げ、つつがなく終了（隠居・引退）することを祝い、胴上げするのである。

胴上げといっても普通のそれだけでなく、インギョーンマの腰に布帯びを結び、インギョーンマを何人（5・6人）かのウットウンマ（妹母。後輩）が、インギョーンマを垂直に持ち上げて降ろすのである。それを胴上げといっている（注⑭）。持ち上げられた女性は、掌をヒラヒラさせるか、あるいは「バンザイ」と叫ぶ。何気ない行為に見えるが、ナナムイの女性達は嬉々として行うのである。微笑ましい光景である。

祭祀は人々の関係を強く結びつける側面を確実に有している。だがその反面、祭祀と現代生活との乖離は如何ともしがたいものがあり、各家庭に経済的な負担を強いているのも事実である。神行事が現代社会のシステムと合致しなければ、神行事を変えるかあるいは行事そのものを無くせばよい、と考えるのは筋である。

だが、一方では神行事の変化・消滅は神の祟りを受けると捉えられている。やはり、ユークイの例になるが、ナイカニウタキ（ナイカニ御嶽）での朝食後、1時間後のサイヌハウタキ（申の方の御嶽）でも食事がある。さらにその1時間後に今度はンマヌハウタキで食事を摂る。1時間毎の食事は無駄であり、食事を準備する人にも負担がかかる。それならば中間のサイヌハウタキでの食事を無くそうとする見解が以前からある。もっともな指摘であり合理的でもある。多くの人々が賛同する。神役の最高責任者であるウンマも賛同する。

しかし、ウンマは自分の代（神役を務める期間）には改めないで、従来通り行って欲しいと主張する。神の怒り・祟りを恐れる所以である。ただ1度の食事をとり止めるにもままならない。

神行事の変化・変更はともかく、行事そのものの消滅はとんでもない、と考えていた。現代社会のシステムや人間関係、シィマのシステムや人間関係の二重構造を生きる西原の人々は、伝統的の神行事にどう対処しようかと迷い苦しみ足踏みしていた。有効な対策がなされない流れの中で、ナナムイに加入する女性が激減し、現在では4人になった。

祭祀の改善・改良どころではなくなり、祭祀を継続するには変更・変容が必然的となった。今年のユークイで神役2人がインギョーする。ウンマとアグシィンマである。かつては、ウンマとアグシィンマが同時にインギョーすることはなかった。今後、祭祀に直接携わる人が更に少なくなる。

祭祀と人間。祭祀に対する西原の人々の意識・観念が集約的にあらわれるのが、旧暦9月のユークイ祭とユークイ祭終了後、1週間前後に行われるンマユイ儀礼であろうと思われる。

西原にとって、ンマユイは単なる神役選出儀礼ではなかった、ということを経史的実実が如実に語っている。

注

注① 沖縄県県史資料編纂計画に基づいての「宮古の部」（大正4年）の報告。大正4（1915）年の報告では、西原に関しては引用した記事しかない。西原分村については、『宮古島在番記』（1368年～1893年）の「同治十三年」の記事や「忠導氏家譜」（同治十三年）にも見える。しかし、『宮古島在番記』と「忠導氏家譜」には、「明治六年ヨリ宮古本島住民ハ～納税ヲ免レタリ」のような移住に関する具体的な記述はない。

大正4年の報告書の原稿の中央部分に、「西辺尋常小学校」の文字がある。報告者が、もし当時の校長であるならば、西辺尋常小学校の第5代校長の石原雅太郎の可能性が高い。石原の在任期間は、大正3年から大正5年までの3カ年である。石原は報告に当たり、西原の分村・移住に関して詳しい人に聞き取り調査をしたと思われる。

注② 西原分村100周年を記念して、1974年西原では様々なイベントが開催された。その一環として、ハナヌンマ5人が池間島まで足を運び、池間島のウハルヂウタキで、池間・西原のハナヌンマで合同祈願した。このことは、当時ナカバイだった本村ウメ（現在88歳）からの聞き取りに拠る。

この事実は、西原で祭祀を行う際、不明あるいは大きな疑問があった場合、神役あるいは神役の代理人が池間島まで直接渡航したことを推察せしめる。

注③ 2013年に佐良浜の「ンマユイ」を調査した。西原と佐良浜のンマユイ儀礼は異なる点もあるが、根本的には変わらない。この年、ある神役に選出された方が引き受けなかったため、現在佐良浜の祭祀は行われていない。つまり、佐良浜は神役が揃わないと祭祀を実施しないのである。この点は西原とは異なる。

注④ 『御嶽由来記』の1707年の首里王府への報告の記事。引用は、『平良市史』（第三巻 資料編1 前近代 1981年 平良市史編さん委員会）に拠る。

注⑤ 1994年から2000年までの現地調査に拠る。但し、2000年は聞き取り調査である。本稿ではその期間を中心に述べるが、必要に応じ前後の事柄にも触れていきたい。

注⑥ ナナムイヌンマのウイディンマは数え年47歳が原則であるが、昨年（2015年）のユークイ祭で、数え年40歳のウイディンマが新たに一人加入した。ナナムイヌンマの人数が少ないので歓迎された。この女性は、夢で神からナナムイに入るよ

う告知された、という。

注⑦ 祭祀に車の導入を行ったのは、ウーンマのU・Tさんの任期期間中である。画期的なことだった。それまでは徒歩だった。車を導入したことから、現在ではトゥムによるウーンマとアークシィンマの送迎はない。

注⑧ 1995年から2000年まで選出対象者で参加希望者がいたのは、1995年、1997年、1999年であった。1995年と1999年の両年はアークシィンマの選出年。1997年は、ウーンマの選出年であった。

つまり、ウーンマとアークシィンマの選出年の時は、選出対象者とその関係者の関心度が高くなることを意味している。

関心度の高さはウハルディウタキの出入り口周辺に村の女性達が集まってくることから理解できる。女性達が何故集まっているのか、一般男性にとっては理解できない。一般男性は女性祭祀集団と村落祭祀についてほとんど知らない状況は現在でも変わらない。

注⑨ 現在では健永会長はいない。「健永会」とはナムイヌンマとナムイヌウヤをインギョーした男女が、数え年60歳の「みどり会」までに加入する間の組織であった。現在「健永会」は、組織そのものが消滅している。

注⑩ 夢の中での神からの告知については、拙論を参照されたい。

注⑪ 1978年に40代後半複数の女性に、なぜナムイに加入したかと聞いたが、ナムイへの加入は当然のことと考えていた。2016年8月にも年齢80代複数の方に同じ質問をしたところ、ナムイへの加入はあたりまえのことと考えていた。しかし、例外的に加入しなかった人もいた。

注⑫ N・Uには生前一度だけお会いし、聞き取り調査した。記憶力が抜群な方だった。在任期間3年。N・Uがウーンマをした期間にナカバイをしたU・M（現在88歳）からの聞き取りでも、N・Uのウーンマ在任期間は3年だったという。

注⑬ 1960年代には、ユークムイの祭祀儀礼中に神懸かりするアークシィンマがいた。U・T（大正2年生。故人）の記憶に拠る。U・Tはウーンマヌトゥムを経験したので、神懸かりの状態を目の当たりしみた、と語った。1978年の調査に拠る。

注⑭ 2013年のユークイ祭では、ンマヌハウタキでも胴上げがなされたが、インギョーンマ持ち上げる人数が少なく、祭りを見ていた一人の男性の手を借りた。筆者の知る限り、胴上げに男性が参加するのは初めての例である。祭祀が変わって行く一例である。

【付記】

2016年（旧暦9月）のユークイで、ウーンマとアークシィンマが同時に引退した。これもこれまでの慣例からすると異例なことであった。従って、旧暦11月に行われたンマユイでは、ウーンマとアークシィンマが選出された。